

鯉淵学園の思い出

鯉淵学園の思い出を引き続き加藤 整さん（10期生）に執筆を依頼いたしました。今回は鞍田純先生と農民作家の丸山義二氏のことを書いてくださいました。

鞍田先生と農民作家丸山義二のこと

著名な農民文学作家である丸山義二（1903-1979）は龍野中学で鞍田純先生（第2代鯉淵学園長）と同級生でした。と言っても丸山義二は父の死去によって中学二年生で退学しているのです。卒業生名簿には載っていないかも知れません。

丸山義二は、昭和11年に書いた「田植酒」が芥川賞候補となり、また「田舎」という作品が同年の第1回農民文学賞に輝いています。さらに（10期生加藤整）昭和15年には満州開拓を取り上げた「庄内平野」を出版しますが、これが戦後の彼を苦しめることになりました。丸山は次のように言っています。



「日本農民を満州移民に駆り立てたのは、日本の農民の貧しさである。しかし、それを小説に書いて庄内農民を大陸開拓に“しばりつけ”たのは、疑いもなくこの私だ。私が『庄内平野』を書きさえしなければ、庄内平野から幾千人の満州移民を出さずにもすんだかも知れなかった。私こそ責められるべきではないか。そう考えると、私の心は重かった。私は顔をあげて東京の街が歩けなかった。」（「蚕糸の光」昭和36年12月号）と。丸山義二の農民文学作品は、意図しなかった国策文学の評価を受ける結果となり、以後丸山義二は小説を世に問うことはありませんでした。

さて、平成8年4月に郷里の龍野市・霞城館で「丸山義二特別展」が開かれました。ここで私は鞍田先生に関する一通の手紙に出会ったのです。当時、地元の有力者である山口義信氏（県議会議員）に当たった昭和35年2月21日付の手紙で、次のような内容のものです。

「先日は、御厄介かけました。さて、三月十三日（日曜）黒田君からの電話により、鯉淵学園長の鞍田純博士に龍野へ行ってもらうことが決定しました。茨城県内原時代の思い出もありましょう。また、鞍田博士は、小生みたいなアホウとちがひ、東畑精一博士門下の秀才、大いにきいて下さい。広山の工場なども御案内申し上げてはどうですか。鞍田博士は、龍野中学（現高校）がうんだ農業方面の最高の学者です。二月二十一日朝」と認められており、さらに「若い、スマートな人です。農業経済学者で理論のするどい方ですから、そのつもりで、酒も大いにいけるとおもいます。これは内緒」と書かれています。私はなるほどの確かな表現だなと感じ入りました。

これより先、昭和31年5月12日に丸山義二は鯉淵学園を訪れ、「日本の農民作家」という題で文化講演会を行っています。その概要は普光江（旧姓柴崎）文江さん（12期生）がとった速記録が「鯉淵学園通信」の第35号に掲載されていますが、これはおそらく鞍田先生のご尽力で来園がかなったものではないかと思えます。（追記）

丸山義二は、小説『庄内平野』が戦争を鼓舞する結果になったという呵責の念から、戦後は小説を世に問うことはなかった、と言われて来ました。ところが先日必要があって、月刊雑誌『農業朝日』（毎日新聞社刊）の昭和32年6月号を調べていたところ、丸山義二作の連載小説「五風十雨」（第2回）が掲載されていることを見つけました。結果的に丸山義二は戦後も小説を書かなかったわけではなさそうです。（なお、この『農業朝日』（昭和32年6月号）には、グラビアで「農村の中堅人物をつくる」として、鯉淵学園が写真入りで3頁にわたって紹介されています。）



頑張っています！同窓生

今回は普光江文江さん（12期生）、近本恭汜さん（15期生）、高木経吉さん（22期生）吉川千鶴子さん（24期生）、山川和也さん（34期生）、門積良幸さん（54期生）に登場していただきました。

主人への挽歌を歌集に



2冊の歌集とともに普光江さん

9月3日、閑静な住宅街の川西市湯山台にお住まいの普光江（旧姓柴崎）文江さん（12期生）をお訪ねしました。ご自宅の玄関には夏の花が美しく咲き、また菜園には収穫間近な夏野菜が育っていました。

普光江さんは、茨城県の出身で昭和 30 年に鯉淵学園に入学されました。学園での思い出をお聞きしますと、「一番の思い出は学園の存在する場所が世間から隔離されたような別世界にあったこと、そして先生も学生も同じ敷地内に住んでいて、まるで小さな国のような感じであったこと、次は入学してまもなく、小出満二学園長が他界されて、親しくご薫陶を得られずとても悲しかったこと、そのお葬式がキリスト教式で初めて賛美歌を歌ったことに深い感動を覚えて、学園通信に何首か短歌を出した。」という記憶があるそうです。

楽しい思い出としては、「茨城県人会で袋田の滝へ行ったこと、藤岡孟彦先生の読書会、藤岡先生に鎌倉の智恵子抄展、栃木の焼子焼の竈場へ連れて行っていただいたこと、また夏休みには故小出先生の膨大な図書の整理のアルバイトをさせていただいたこと、秋の収穫祭では豪勢なファイヤーを囲んで歌ったり、踊ったりしたこと、女子寮（紫苑寮）は 1 室が 2 年生と 1 年生で入り、食事は授業の一環となっていて栄養分析と料金を加味した献立表を食物の先生に提出して OK が出たら食品加工場に食材の買い出しに行ったこと、当時はガスがなく、昔ながらの竈に薪をくべて焚いていた。初めチョロチョロ中パッパなどご飯の炊き方を先輩から教わり、お焦げが少しできるぐらいが美味しいことも知った。また農場から搾りだての牛乳が届き、牛乳が大好きになったことも忘れられない。」と話されていました。その他、「演劇部での『土』の上演、文芸部の活動（青芦班）、雪の夜の提灯事件、肥桶かつぎ、門前の床屋さんで当時流行のヘップバーンカットをしたことなども忘れられない。」と学生時代を振り返り懐かしく話されていました。

昭和 32 年鯉淵学園を卒業され、卒業後は学資を援助してもらった茨城県に生活改善普及員として奉職するはずだったそうですが、当時はものすごい就職難の時代でそれが叶わず、全く想定外の東京の都民劇場事務局に就職され文化関係の仕事につかれました。普光江さんは「田舎の山猿が都会に出てきたのですから面くらうこと多々ありましたが、知らないことを知ると言うのは楽しいことで苦労とは思いませんでした。また、新しい世界が拓けたことも確かです。」と話されていました。

昭和 37 年には昨年 12 月に他界されたご主人と結婚し、翌年に都民劇場事務局を退職されました。結婚後は主婦業に専念される傍ら、短歌は同人、書道（漢字、仮名）は師範（9 段）、フランス刺繍は教授の腕前であります。またボーリング歴は 30 年、ラジオ体操を 40 年、ガーデニングも 50 年と元気に続けておられます。自宅にある庭園で花や野菜を作って楽しんでおられます。最近、近くの整骨院で健康保持のため筋肉トレーニングをしておられます。

ライフワークの一つである短歌についてお聞きしますと、短歌は高校時代から始め、「高校文学」（昭和 28 年 9 月）歌人高田浪吉選で秀逸第二席に入り、鯉淵学園時代は歌人香川進氏の「地中海」に所属し活動されました。昭和 47 年に歌人石本隆一氏が主宰した「氷原」で

創刊号より同人となり活躍されましたが、残念ながら平成 25 年 6 月「氷原」が終刊となりました。平成 25 年 8 月に歌人長澤ちづ氏の「ぶりずむ」創刊で同人となり現在に至っておられます。

普光江さんは歌集を 2 冊発刊されています。第一歌集は昭和 62 年に「青い星の住人—蝸牛」、第二歌集は平成 8 年に「白の航跡」をそれぞれ発刊され、神戸新聞、読売新聞などに紹介されています。また平成 11 年に日本歌人クラブ、全日本短歌大会にて選者賞に入選されるなど輝かしい功績を残されています。

今後の歌集の作成をお聞きしますと、普光江さんは「主人が亡くなったあと、虚無感にとりつかれ、なかなか立ち直れないでいたが、短歌をずっと続けていたお陰で、その中に自分の心や姿を客観的にとらえることができました。主人への挽歌を何とか歌集におさめたいと思っています。第二歌集から 18 年が過ぎ、歌の多さで編集に苦労しているところです。」と笑顔で話してくださいました。

普光江さんは、過去に小学校・中学校の P T A の役員（総会議長・副会長）として重責を果たされ、ご主人も中学校の校章をデザイン化されるなど、学校の教育活動に父兄として積極的に参加されました。また、現在お住まいの町内自治会では、子供会の役員、環境部の役員、ブロックの幹事などを務められ、今は班長として頑張っておられます。

最後に、鯉淵学園の同窓生（後輩）の皆さんに激励の言葉をお願いしました。普光江さんは「卒業後、50 年目の同窓会が茨城県で開催され、母校に立ち寄りました。50 年の歳月は驚くほど建物が変わり、樹が大きくなっていました。学生食堂も近代化されていました。後輩たちには元気で明るく社会に役立つ人になってほしいと心から願っています。」と在學生にエールを送っておられました。

普光江先輩、三作目の歌集を期待しています。完成の暁には、是非読ませてください。今後のご活躍をお祈りいたします。

夫婦揃っての健康が一番



畑仕事をされている元気な近本さん

9月10日、豊岡市但東町三原にお住まいの近本恭汎さん(15期生)をお訪ねしました。県道56号線の福知山市夜久野町を抜けて県境の峠を越え、豊岡市但東町のオアシスロードを走っていると、大きな赤色と黄色の花びらをつけた「カンナ」が青空に映えて綺麗に咲いていました。ご自宅に着くと奥様に迎えていただき、さっそく居間で取材しました。

近本さんは、昭和33年4月に鯉淵学園の農業協同組合科に入学されました。入学時を振り返り、「但馬の山奥で育った田舎者が関東平野を知らない、学園周辺には山並みがない、谷間がない、川がない、農場のあの広さにびっくりした。」と話されていました。そして、学生食堂の主食は麦飯であったので、時々出される白飯やサンマの煮付けがとても美味しかったこと、秋になると梨園への夜襲や女子寮への悪戯で鞍田学園長や白田先生からこっぴどくお叱りを受けたことなどを懐かしく話されていました。

学習面では全国農協中央会の甲斐先生の監査論が面白く、監査士の受験勉強に大いに役立ち、今でも5セル政策、3段論法・会計原則の一般原則などをよく覚えているそうです。

昭和35年3月に鯉淵学園を卒業され、翌4月に地元の農協に就職し3年間勤務されました。その後、昭和38年4月に「兵庫県農協中央会」に就職され、平成11年8月に定年退職されるまで、主に単位農協の経営指導、役職員教育(研修所)に精励されました。特に中央会在籍中には、農協合併や不振農協対策で苦労したことが印象深いそうです。退職後の1年間は中央会からの出向という立場で大規模合併の西播地区農協合併事務局に勤務されました。平成17年6月から「たじま農協」と「北但東部森林組合」の監事に就任され2期6年間務められました。そして平成26年6月からは「北但東部森林組合」の理事に就任され活躍されています。



見事な木彫作品です



家族で西穂高独標山頂にて

平成17年6月からは兵庫県立みてやま学園4年制大学に入学され、卒業後の平成22年4月から同学園2年制大学院にも在学されていました。現在は平成22年4月から入学されている但馬高齢者いきがい創造学院の木彫教室に毎週1回通学され、実に見事な動物、鳥などの木彫を作っておられます。

お住まいの三原地区は29戸の集落であり、近本さんは数年前に区長や寺役員など経験された重鎮であります。しかし、当地区が後継者不足で役員のなり手がなく、経験者が区長補佐や宮役員を受けざるをえないと話されていました。また、近年、三原地区に熊、鹿、猪が出没し、柿、栗、野菜などを食い荒らす被害が絶えないそうです。昨日も裏の柿の木に熊がよじ登った爪の痕があると話しておられました。

近本さんに今後の暮らしの計画をお聞きすると、「後期高齢者の仲間入りをした今日、老体にムチ打って何ができよう。」との返事がありました。足を引きずりながらの年数回のゴルフ、夫婦2人分の家庭菜園、旅行を兼ねた登山、グランドゴルフ、ドライブと人様に迷惑をかける心がかげ、夫婦が揃って健康であることを願いたいと話しておられました。そして、菩提寺の安国寺と同じ寺名の安国寺を巡る旅を年1回続けられています。特に、登山はご夫婦一緒に日本の名山である『白山、立山、白馬、乗鞍、穂高』などを登られたそうです。

近本先輩、健康にご留意いただき、いつまでもお元気で活躍ください。

養父市内第1号の法人を設立



自宅玄関で孫と一緒に高木さん

9月1日、養父市八鹿町宿南にお住まいの高木経吉(22期生)さんをお訪ねしました。ご自宅を訪問しますと高木さんがお孫さん(2歳)とともに迎えていただきました。ちょうど、ご自宅の前が町立宿南小学校であり、始業式を終えた児童たちが運動場で元気よく遊ぶ声を聞きながら取材をしました。

高木さんは、地元八鹿高校を卒業し昭和40年に鯉淵学園農業協同組合科に入学されました。農業協同組合科ではあまり勉強しなかったため、恩師宮島先生から厳しく教えられたことが忘れられないと話されていました。夏休みは郷里に帰るのではなく、酪農場や土壌研究室でアルバイトをして稼いだり、体育祭にはモニュメント作りや孟宗竹でインディアンの顔を作ったりしたそうです。学生寮は東寮、西寮、曙寮に入り、夜間実習と称し

特産品普及と食育に取り組んで



直売所の店内での吉川さん

て寮近辺の野菜畑からキャベツ、白菜などを無断で採ってきて寮生たちと食べたという思い出を懐かしく話されていました。

昭和42年3月に鯉淵学園を卒業し、翌4月に八鹿町農協（現たじま農協）に就職されました。農協在職中には全業務を経験され、特に金融業務を担当されていた時には、裁判所や弁護士に大変世話になり、六法全書を片手に法律の勉強をされたそうです。また、農協に就職して3年経過した23歳の時に、地元区画整理の役員となり、町内全水田の換地事務を担当されました。農協の勤務を終えたあと、毎晩のように話し合いの会合が開かれ大変苦労して換地の仕事をすると懐かしそうに話されていました。

高木さんはたじま農協で55歳を迎えられた時に早期退職され、専業農家として農業経営を始められました。農地を拡大し5年間で借地を含めた自作地が4haとなった時に、高木さんが中心となって集落内の農家で話し合いの場をもち、将来の後継者不足を憂い、解消するために営農組合設立の検討を始められたそうです。その結果、平成23年に「宿南営農組合」が設立されました。そして、補助制度、税制面等で営農組合よりも優遇措置がある農事組合法人化に向けて23年から25年の3年間に勉強会、先進地視察、研修等をおこない、平成26年4月に宿南地区5集落をまとめた「農事組合法人宿南営農組合」を設立されました。この法人は5集落をまとめた法人形態で他に類をみない特異のものであり、しかも養父市内で第1号の農事組合法人であります。また養父市は農業特区で全国的に知られており、この法人も注目を集めているそうです。当面は稲作中心で生産規模は10ha、JAや地域住民に「コウノトリ米」として精米で販売されています。高木さんは、この法人の副組合長として活躍されています。

農事組合法人以外で地域の活動内容をお聞きすると、宿南地区の区長（4年目）であり8集落の代表者、寺役員で会計、盆踊り保存会の会長兼踊り手、たじま農協のOBで地区会長（グランドゴルフ、旅行の世話）、交通安全協会の理事、母校八鹿高校の地区役員などのほか、地元野菜直売所の構成員で四季折々の野菜を出荷されているなど大変多忙な日々を送っておられるようでした。

趣味をお聞きすると「百姓をすること以外に何もありません。まさに晴耕雨読ならぬ晴耕雨耕である。」というユニークな言葉が返り、農業一筋の心意気を感じました。また、「最近になって人を世話することが多くなり、酒を飲む回数も多くなった。」と話されていました。

最後に、鯉淵学園の同窓生（後輩）に対して激励の言葉をお願いしますと、「在学中に教えてもらったことを活かし、地域ために行動し、模範となしてほしい。そして、日本農業のために行動してほしい。」と話されていました。高木先輩、健康にご留意いただき、益々のご活躍と農事組合法人の発展を祈っています。

10月5日、国道427号線を走り多可町加美区から神崎郡神河町に通じる県道8号線沿いにある「かみの朝市南直売所」をお訪ねしました。この直売所に加美区寺内の吉川千鶴子さん（24期生）がスタッフとして働いておられました。近くに平成の名水百選に選ばれた「松か井の水」という湧き水があり、遠くは京阪神や姫路方面から名水を求めて連日にぎわっています。今日も名水を汲み終えた観光客が帰りに新鮮な野菜や米、手作り加工品などを買いに直売所に来られていました。大変お忙しい中を取材や写真撮影に協力してくださいました。

吉川さんは昭和42年4月に鯉淵学園生活科に入学されました。学生時代の思い出をお聞きしますと、やはり寮生活のことが心に残っているそうです。先輩、後輩のけじめがありながら、舎長、舎員として和気あいあいのとても楽しい寮生活だったそうです。毎週土曜日のダンスの会も楽しみの一つで、それまでは盆踊りは疎か、フォークダンスくらいしか踊ったことがなく、運営委員として会の運営に関わる中で引込み思案だった自分が大いにプラスになったと話されていました。また生活科の担当が新井先生、白田先生であり、大変お世話になったと当時のことを懐かしく話されていました。

吉川さんは昭和44年3月に鯉淵学園を卒業されました。卒業後は加古郡稲美町の天満農協に生活指導員として就職し、同期の藤本敏雄さんと同じ職場だったそうです。隣接の母里農協には折田佳代子さん（旧姓有村・鹿児島県在住）と先輩の甲谷克己さん（21期生）が勤めておられました。その折田さんとは一時期いっしょに下宿され、寮生活の延長のような暮らしをしておられたそうです。「彼女は明るく行動的な人でいつも助けてもらうことばかりでしたが、とても気が合い充実した日々を送りました。」と当時を振り返っておられました。

その後、結婚をきっかけに天満農協を退職され、地元に戻ってこられました。そして、昭和54年頃からご主人と糸の加工業を営まれておられましたが、元気があつたご両親が平成15年頃から体調を崩され、平成19年3月に父親、その年の12月に母親が他界されたそうです。

生徒たちと共に園芸を

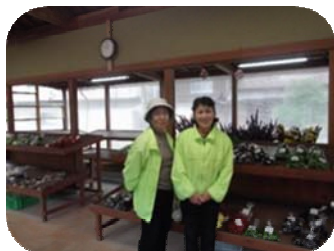
平成 20 年には長年営まれた糸の加工業を閉じ、現在はご主人と米と野菜を栽培しておられます。家族は 8 人で息子さん夫婦と孫 4 人に囲まれて楽しく暮らしておられます。

吉川さんは週 2 回（水・日曜日）、早朝 6 時から 14 時まで「かみの朝市南直売所」で働いておられます。以前は生産者が当番で働いていたそうですが、事務処理の効率化により今は女性 2 人が専従で切り盛りしているそうです。しかしながら、生産者の高齢化に伴い、出荷数量が減少していくなかで、何とか直売所に活気を取り戻したいと加工品の「あじさいグループ」を立ち上げられました。まだ、品数は少ないが、漬け物や鹿肉の加工品を手がけられ、毎月第一日曜日に直売所で「もみじいなり」「鹿コロ入りコロッケ」などを販売されています。

吉川さんは、かみ特産品クラブに属して、鹿肉のカレー、竜田揚げ、コロ煮、棒餃子、佃煮など、鹿肉メニューを PR するために色々なイベントに参加されています。昨年の多可町産業展にはジビエレストランのコーナーに参加され大変好評だったそうです。「鹿肉は低カロリー、高タンパクとヘルシーな食材ですが、まだ普及率が低く、もっと身近に感じていただき浸透していったらいいな。」と話されていました。



直売所の入り口で



もう一人のスタッフと

平成 12 年に地元婦人会の役員を終え、友人に誘われて平成 13 年に全国食生活改善の会（兵庫県ではいずみ会）に入会されました。この会では、食育活動で地元中学校の家庭科の時間に調理実習のサポートをしたり、子育て中のお母さん対象の食育教室や、小学生の夏休み・冬休みの料理教室などに出役して食の大切さや調理する楽しさを教えたり、また次の世代に伝えていきたい伝統食づくりなどの活動に取り組んでおられます。

吉川さんは 4.2 ha の水田で米作りに励んでおられるほか、畑では里芋、長ネギ、黒大豆、スイカ、大根、ニンニクなどの野菜を栽培し、収穫した野菜は農産物直売所と J A みのり A コープの生産者コーナーに出荷しておられます。「野菜づくりは楽しみの一つであり、化学肥料は出来るだけ使わず、堆肥や鶏糞、米ぬか、EM・乳酸菌などを使用して安全、安心で美味しい野菜作りを目指しています。」と笑顔で話してくださいました。

最後に同窓生の皆さんに一言メッセージをお願いしますと「加美区には多くの観光地があります。加美区に来られた時にはぜひ直売所にもお越し下さい。」と話されていました。吉川先輩、加美区の発展に益々のご活躍をお祈りいたします。



喫茶店にて山川さん

8 月 17 日、加古川市八幡町にお住まいの山川和也さん(34 期生)をお訪ねしました。ご自宅の近くにある喫茶店で待ち合わせ、珈琲を飲みながら取材をしました。

山川さんは、昭和 52 年 4 月に鯉淵学園の畜産科に入学されました。特別研究のテーマは「堆肥の多量還元による飼料作物の硝酸対窒素について」であり、学生時代はその研究に没頭したそうであります。その成果が認められ卒業式には東畑精一賞を授与されたとのことであります。学生時代の思い出は数多くあり、特に農業経済論や協同組合論などの講義で教わったこと、学生自治会の役員をしたこと、食堂の食器洗いで苦勞したこと、洗面器でラーメンを作り食べたこと、楽しかった寮生活のことなどを懐かしく話されていました。

在学中に農業改良普及員の資格を取得していたので、卒業後は兵庫県職員という道があったそうですが、登記事務所就職し土地家屋調査に 7 年間従事されていました。その後、県の教員資格を取得し、県立上郡高校は 3 年間、県立播磨農業高校に 5 年間、県立農業高校には 10 年間の教員生活を送られ、今年の 4 月からは播磨町にある県立東播磨特別支援学校に転勤されました。特に県立農業高校時代には、農業環境工学科長として小学校教員や生徒たちに四角豆やゴーヤを使った環境活動を指導したこと、そして測量競技大会で県内 3 連覇を果たし、全国大会で優秀賞に輝いたことなどの思い出を数多く話されていました。

現在勤務している特別支援学校では、生徒たちに園芸を中心に社会、理科などを教えているほか、父兄には子供が自立するための手立てを説明されているとのことでした。特別支援学校は高校と違ってとても難しいが、大変やり甲斐のある教育現場であると話されていました。最近パソコンを活用した業務が多いので、上達するためパソコン教室にも通っておられます。

また、山川さんは高校に勤務していた頃に、2 級建築士の資格を取得し、健康増進に役立つ自然療法のアロマセラピーや嵯峨天皇を開祖とする華道の嵯峨御流を学ぶなど、勉強心が旺盛な方のように感じられました。趣味は多く特に菊作りは好きで加古川市の菊同好会に入会され活動されています。最後に同窓生の皆さんへのメッセージをお願いします。

しますと、山川さんは「元気で頑張っていますとお伝えください。」と話されました。山川さん、健康にご留意いただき、益々ご活躍をお祈りいたします。

安心して美味しいベビーリーフを



ハウス内での門積さん

11月10日、赤穂郡上郡町にお住まいの門積良幸さん(54期生)をお訪ねしました。門積さんのご実家は国道373号線沿いにあり、そこから少し離れた田んぼの真ん中に門積農園のビニールハウス5棟が建っていました。天気が良かったのでハウスの前で取材をしました。開口一番、「先日、毎日放送が取材にきました。」と笑顔で話されました。

門積さんは平成10年4月に鯉淵学園農業経営科学科(4年制)に入学されました。学生時代の思い出をお聞きしますと、高校は普通科出身なので農業の知識が全くなく、入学当初は㎡、反、haなどの面積の単位にイメージがわからず、普及専攻の授業がとても辛かったそうです。そのような中で、秋葉先生には大変お世話になったそうです。専攻は「農村社会学」で、卒論は農業と農村の繋がりと農村と祭りをテーマにしてまとめられました。4年間の寮生活では、入学当初から2年間はきつかったが、先輩・後輩の関係という貴重な経験ができ、楽しい有意義な寮生活であったと話されていました。

門積さんは平成13年3月に鯉淵学園を卒業されました。卒業後は茨城県つくば市にある有限会社「盛田アグリカルチャーリサーチセンター」に入社され、6年間、西洋野菜担当として、野菜栽培(ベビーリーフなど)、堆肥作りなどを経験されました。その間、2年ほどパラオ共和国の同会社の農園で野菜栽培や焼酎・フルーツジュースの製造指導をされました。

平成19年に兵庫県に帰郷し、県の嘱託農業改良普及員として1年間勤務されました。そして、平成20年4月から本格的に専業農家として農業経営を始められました。当初は資金がなかったので、補助金を借りてビニールハウスを建設するなど、苦労が続いたそうです。現在では畑40アール(うちビニールハウス16アール)、水田90アールの経営規模となり、ベビーリーフ、西洋・露地野菜を栽培するほか、米(ヒノヒカリ)も作られています。特に野菜は安心して

美味しいものを食べていただくために、農薬や除草剤を使用しないで栽培されています。スタッフはアルバイト2名、研修生1名で午前中に収穫し、午後に取り先に配達しているそうです。取引先は姫路、山崎のほか、遠くは東京、大阪、富山などでレストランや農産物直売所が44社ほどあり、ロコミで増えた個人向けの配送もされています。

ベビーリーフは10種類あり、平成20年に兵庫県認証食品・ひょうご安心ブランドを唯一取得されています。とくにサラダリーフは洗うだけでよく、手軽で栄養価が高く、色鮮やかなサラダが食べられ、サラダうどん、パスタ、サンドイッチなどに最適だそうです。先日、念願であったベビーリーフのための無添加ドレッシング(1本800円)ができあがり、農産物直売所やレストランで販売しているそうです。



美味しいサラダリーフ



無添加ドレッシング

門積さんは、上郡町と相生市の若手農家グループ「真心ファーマーズ」に加入し、主催する田植え、稲刈りなどのイベント活動に参加されています。また、地元の高齢者大学で年2回、野菜の栽培方法などの講演をされておられます。趣味は海釣りやレーシングカートであります。仕事が多忙で出掛けられないそうです。最後にこれからの目標はお聞きしますと、「本業をもっと伸ばしていきたい。そして新規に就農される方をもっと応援していきたい。」と話されていました。門積さん、益々のご活躍を祈っています。

お知らせコーナー

加藤 整さん(10期生)が鯉淵学園初代学園長、小出満二先生(1879-1955年、養父市八鹿町出身)の“小伝”を出版される予定です。ご希望の方は加藤さん宛に連絡してください。なお、自費出版のため、部数に限りがあります。

- ・書名 『日本農業教育の碩学 小出満二その業績と追憶』
- ・版型 B6版 縦書き 約170頁
- ・著者 加藤 整
- ・主な内容 出石藩主と小出家、先生の生い立ち、但馬牛産論のこと、留学中のこと、農業教育の考え方、蔵書と古農書の研究、九州大学・東京高等農林時代、鯉淵学園時代、エピソード等(序文は西村典夫先生)
- ・出版時期 11月下旬(予定)
- ・頒布価格 1部 1,000円(送料別)
- ・連絡先(加藤さんの自宅電話番号 079-423-3850)

平成26年11月発行 編集者：福井寛行(26期生)
〒677-0038 兵庫県西脇市大垣内44-2
TEL(FAX)0795-22-1815 携帯090-1022-2672
E-mail:hirokei-677@lime.ocn.ne.jp